

帝国主義と福音

ポストコロニアル批評による新約聖書の「福音」の読解 (1)

小林 昭博*

Imperialism and Gospel Reading the Term “Gospel” in the New Testament through Postcolonial Criticism (1)

Akihiro KOBAYASHI*
(Accepted 9 December 2016)

1. 問題の所在

「福音」(英語 gospel, ドイツ語 Evangelium, フランス語 évangile) とは, イエスに関する使信や事績を表すキリスト教の術語である¹⁾。新約聖書には, 主として名詞形の *εὐαγγέλιον* (福音) と動詞形の *εὐαγγελίζομαι* (福音を告げ知らせる) が用いられている²⁾。この術語の意味を理解するには, 当然その社会史的な背景を考慮に入れることが不可欠である。近年の社会史研究によれば, 名詞形 *εὐαγγέλιον* はギリシャ・ローマ世界, 取り分けローマ皇帝の凱旋や即位を帝国内に発布するさいの用語をその背景にしているとの想定がなされ, 動詞形 *εὐαγγελίζομαι* はユダヤ世界, 特に旧約聖書(ユダヤ教聖書)における戦勝の告知やバビロン捕囚後の「エルサレム＝シオン」の再興と永遠の世界統治を預言するさいのイザヤ書の用語をその背景にしているとの推定がな

されている。

このような従来の社会史的研究の推論からも窺われるように, 名詞形 *εὐαγγέλιον* と動詞形 *εὐαγγελίζομαι* は, そのいずれの場合においても, 「戦争」と密接に関係する。しかも, その場合の戦争とは, 均衡する経済力や軍事力を持った「民族」(国)と「民族」(国)との間の戦争というよりも, 圧倒的な経済力と軍事力を有する古代世界の「帝国」による周辺「諸民族」(諸国)に対する「侵略」と「占領」の色彩を色濃く持っている。すなわち, この語は古代世界の「帝国」による「侵略」と「占領」を「良い知らせ」として告知するための語だということであり, 古代世界の「帝国主義」(imperialism)を称揚していると思なしうということである。

このような新約聖書の「福音」の社会史的背景を勘案すれば, この術語の意味を詳らかにするうえで, 帝国主義や植民地主義に対する批判的実践として知られる「ポストコロニアリズム」(postcolonialism)の視点から新たな光明が与えられると考えられるのである。

そこで, 本論文では, 「ポストコロニアル批評」(postcolonial criticism)を用いてユダヤ世界とギリシャ・ローマ世界の「福音/良い知らせ」の意味を鮮明に描き出しつつ, 新約聖書における「福音」の意味を「ポストコロニアリズム」の視点から再考することを試みたい。

2. 旧約聖書における *בְּשֵׁר* (בְּשֵׁרָה/בְּשֵׁרָה)

2.1. ヘブライ語の語根 *בְּשֵׁר* (bśr) の語源 —— セム語(古代近東語)との比較

新約聖書の「福音」の社会史的背景であるユダヤ

¹⁾ ペトル・ポコルニーはこの語には以下の三つの異なった意味があると指摘する(Petr Pokorný, *From the Gospel to the Gospels: History, Theology, and Impact of the Biblical Term 'Euangelion'*, BZNW 195, Berlin/Boston: de Gruyter, 2013, 2)。

(1) イエスによって宣べ伝えられた使信としての「福音」

(2) 復活節後のキリスト教信仰の宣教内容としての「福音」

(3) 新約聖書の重要な文学類型としての「福音〔書〕」

なお, ポコルニーは () 括弧付きで, これら三つ以外に “Metaphorical use and mixed forms” があることをも指摘している (*ibid.*)。

²⁾ なお, これ以外には, *εὐαγγελιστής* (福音告知者/福音宣教師) と *προεναγγελίζομαι* (予め福音を告げ知らせる) という派生語が用いられており, その用例は前者が3回(使徒21:8, エフェソ4:11, IIテモテ4:5), 後者が1回(ガラテヤ3:8)である。これらの用例については, 新約聖書の用例を扱うさいと一緒に論じる。

* 酪農学園大学農食環境学群循環農学類キリスト教応用倫理学研究室

Christian Studies and Applied Ethics, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

世界を論じるうえで、最も重要なのは旧約聖書（ユダヤ教聖書）である。新約聖書で用いられているギリシャ語の名詞 *εὐαγγέλιον* と動詞 *εὐαγγελίζομαι* の背景とされる語は、ヘブライ語の動詞 בָּשַׂר （良い知らせを告げ知らせる）およびこの動詞から派生した名詞の בְּשָׂרָה / בְּשָׂרָה （良い知らせ）である³⁾。

旧約聖書の用例に当たる前に、まずはヘブライ語の動詞 בָּשַׂר （語根 בִּשַׁר ）の語源に遡って、この語のより大きな社会史的背景に意を配ることにしたい。

ヘブライ語の語根 בִּשַׁר (*bšr*) の語源は、ほかのヘブライ語の語彙同様にセム語（古代近東語）に遡源する。ウガリット語、アッカド語、アラビア語との比較からも明らかにされているように、*bšr* はセム語に共通する語根である⁴⁾。まずは、*bšr* を語根とするセム語のいくつかの言語を例示しておこう⁵⁾。

東セム語のアッカド語には、ふたつの異なる綴りの動詞形 *bussuru* / *passuru*（知らせをもたらす）とその名詞形 *bussurtu*（知らせ）が用いられている。

南セム語では、アラビア語の動詞 *baššara*（良い知

らせをもたらす / 喜ばしい知らせをもたらす）とその名詞形 *bušr* / *bišarāt*（良い知らせ）、古代南アラビア語の動詞 *ʾbšr*（良い知らせをもたらす）、エチオピア語の動詞 *absara*（良い知らせをもたらす / 喜ばしい知らせをもたらす）とその名詞形 *besrāt*（良い知らせ / 喜ばしい知らせ）といった語を確認することができる。

西セム語——ここにヘブライ語も属するが——を例記すると、その代表的言語であるウガリット語では、動詞形 *bšr*（喜ばしい知らせをもたらす）とその名詞形 *bšrt*（喜ばしい知らせ）があり、タルグムに代表される——イエスの日常言語でもあった——タルグムなどに用いられているユダヤのアラム語では、 בִּשַׂר / בְּשָׂרָה (*bsr* / *bšr* [良い知らせをもたらす]) というふたつの微妙に異なった綴りの動詞を確認することが可能である⁶⁾。

ここに例示した *bšr* を語根とするセム語（東セム語、南セム語、西セム語）のなかで最古の言語のひとつはアッカド語だが、すでに確認したように、アッカド語の *bussuru* / *passuru* は「良い知らせをもたらす」という意味ではなく、善悪等の価値判断を前提としない、単に「知らせをもたらす」というニュートラルな意味の動詞であったと目されている。それゆえ、その「知らせ」(*bussurtu*) の内容に善悪や吉凶の意味を持たせる場合には、*bussurat limnim*（悪い知らせをもたらす）、*bussurat dumqim*（良い知らせをもたらす）、*bussurat ḥadê*（喜ばしい知らせをもたらす）といった表現が用いられていたのだが⁷⁾、その用例の多くは「良い知らせ」を表すために用いられていることが知られている⁸⁾。

また、アラビア語の *baššara* には、「物の表面を片付ける」という意味があり⁹⁾、ヘブライ語の בָּשַׂר も元来は「顔を擦る / 表面を擦る」や「表面を滑らかにする / 表面を片付ける」という意味を表す動詞であったと考えられているが¹⁰⁾、その場合も肯定的な意味合いで使用されていたことは容易に想像がつく。

さらに、アラビア語の動詞 *baššara*、古代南アラビア語の動詞 *ʾbšr*、エチオピア語の動詞 *absara*、ユダヤ的アラム語の動詞 בִּשַׂר / בְּשָׂרָה (*bsr* / *bšr*) は、そのほとんどの用例において「良い知らせをもたらす」

³⁾ 本論文の冒頭で触れたように、「福音」(*gospel*, *Evangelium*, *évangile*) という語は、イエスに関する使信や事績を表すキリスト教の術語であり、旧約聖書の用語である בָּשַׂר と בְּשָׂרָה に「福音」という訳語を充てることは適切ではない。また、同様の問題は、キリスト教以前のギリシャ・ローマ世界にも当然該当することである。そこで、以下の論述では、「福音」という術語は新約聖書に限定し、ユダヤ世界とギリシャ・ローマ世界については、「良い知らせ」という訳語を充てることにする。

⁴⁾ Ernst Jenni/Claus Westermann, *THAT* [*Theologisches Hnadwörterbuch zum Alten Testament*, I-II, Gütersloh: Christian Kaiser/Gütersloher Verlagshaus, 1994/1993], I (1994), 903f.; Stephen T. Hague, Art. בִּשַׁר , *NIDOTTE* [William A. Van Gemeren (General Editor), *New International Dictionary of Old Testament Theology and Exegesis*, I-V, Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1997], I (1997), 775.

⁵⁾ 以下のヘブライ語の語根 *bšr* とセム語との比較については、上注 4 の文献に加えて、Otto Schilling, Art. בִּשַׁר , *ThWAT* [G. Johannes Botterweck/Helmer Riggren/Heinz-Joseph Fabry/Holger Gzella (Hrsg.), *Theologisches Wörterbuch zum Alten Testament*, I-X, Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz: Kohlhammer, 1973-2000], I (1973), 846; BDB [Francis Brown/Samuel R. Driver/Charles A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament, with an Appendix containing the Biblical Aramaic: based on the Lexicon of William Gesenius*, Oxford: At the Clarendon Press, 1907, 1952], 1421.; Ludwig Koeler/Walter Baumgartner, *HAL* [*Hebräisches und Aramäisches Lexikon zum Alten Testament*, I-V mit Supplementband, Leiden/New York/Köln: Brill, 1967-1996], I (1967), 156R., 157L.; David J. A. Clines (ed.), *DCH* [*The Dictionary of Classical Hebrew*, I-IX, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1993-2016], II (1995), 276r.-277l. を参照した。

⁶⁾ Koeler/Baumgartner, *HAL* I, 156R.

⁷⁾ Schilling, *ThWAT* I, 846; Jenni/Westermann, *THAT* I, 904.

⁸⁾ Schilling, *ThWAT* I, 846.

⁹⁾ BDB, 1421.; Hague, *NIDOTTE* I, 775.

¹⁰⁾ BDB, 1421.

という意味で使われているということが知られている¹¹⁾。

加えて、ウガリット語の bšr は「喜ばしい知らせをもたらす」を意味すると説明されているが¹²⁾、アラビア語、古代南アラビア語、エチオピア語、ユダヤ的アラム語の「良い知らせ」とウガリット語の「喜ばしい知らせ」とが別の意味内容を指し示していると見なす必要はない。上述したように、アラビア語の baššara やエチオピア語の absara が「良い知らせを伝える」という意味であることを勘案すると¹³⁾、セム語に共通の語根 bšr には「良い知らせ」と「喜ばしい知らせ」のいずれのニュアンスをも含む肯定的な意味があると見なすのが妥当であろう。

より具体的な用例として重要なのは、セム語に共通の語根 bšr が「子どもの誕生の知らせを聞いたときの喜びと関係している」¹⁴⁾ということである。例えば、アラビア語の動詞 baššara には、「彼はひとりの新しい息子が誕生した知らせを聞いて喜ぶ」¹⁵⁾という用例が認められ、ウガリット語の動詞 bšr には、「アナトはパールを喜ばせるために、彼に雄の子牛の誕生に関する喜びの知らせを持ってくる」¹⁶⁾という用例がある。このふたつの用例は前者が「男子の誕生」、後者が「雄＝男子の誕生」であり、このように誕生の喜びが「男子」の誕生に限定されていることを鑑みると、語根 bšr が古代世界の家父長制社会の男性中心主義を色濃く反映させていることが窺われるのである。

また、「男子＝雄の誕生」以外の用例としては、「勝利の知らせ」¹⁷⁾や「アナトは、パールのために家が建てられるという知らせを彼に持って来る」¹⁸⁾という用例が認められ、神々や王たちの戦勝や繁栄という用例から、語根 bšr には古代世界の「戦争」との結びつきがあると想定することがいちおうは可能である。

3. 旧約聖書における $\text{בִּשְׂרָ} (\text{הַבְּשָׂרָ} / \text{בְּשָׂרָ})$ の用例

3.1. 旧約聖書における用例の一覧

旧約聖書において、 בִּשְׂרָ を語根とする語は全部で 30 回用いられている¹⁹⁾。各文書ごとの内訳は、サムエル上に 2 回 (4:17, 31:9)、サムエル下に 12 回 (1:20, 4:10[2 回], 18:19, 20[3 回], 22, 25, 26, 27, 31)、列王上に 1 回 (1:42)、列王下に 1 回 (7:9)、歴代上に 2 回 (10:9, 16:23)、詩編に 3 回 (40:10[口語訳 40:9], 68:12[口語訳 68:11], 96:2)、イザヤに 7 回 (40:9[2 回], 41:27, 52:7[2 回], 60:6, 61:1)、エレミヤに 1 回 (20:15)。ナホムに 1 回 (2:1 [口語訳 1:15]) である。

また、30 回の用例のうち、動詞形 בִּשְׂרָ が 24 回を数えるが、その用例はヒトパエル動詞の 1 回の用例を除くと、残りの 23 回はすべてピエル動詞が用いられている²⁰⁾。そして、残りの 6 回が名詞形 $\text{הַבְּשָׂרָ} / \text{בְּשָׂרָ}$ での用例である²¹⁾。

以下の論述では、まずはイザヤ書以外の用例を概観し、その後にイザヤ書に関して少し詳細を見ていくことにする。その理由は、すでに指摘したように、新約聖書に用いられている動詞形 εὐαγγελίζομαι の言語的・文化的・社会史的な背景は、イザヤ書に用いられている終末論的救済の用語であるヘブライ語の動詞 בִּשְׂרָ であると考えられるからである。

3.2. 旧約聖書における $\text{בִּשְׂרָ} (\text{הַבְּשָׂרָ} / \text{בְּשָׂרָ})$ の用例 — イザヤ書以外の用例

3.2.1. サムエル記上・下

3.2.1.1. サムエル上 4:17

サムエル上 4:1b-11 におけるエベン・エゼルでのイスラエルとペリシテとの戦争の記述に続けて、同 4:12-22 において戦渦を逃れたひとりのベニヤミン族の男性がイスラエルの祭司エリに、イスラエルの敗戦、多くの兵士たちの戦死、エリのふたりの息子の死、そして神の箱がペリシテに奪われたことを伝えており、その知らせをもたらした男性が「知らせを告げる者」($\text{בְּשָׂרָ} \text{הַבְּשָׂרָ}$) と呼ばれている。

¹¹⁾ Schilling, *ThWAT* I, 846.

¹²⁾ Schilling, *ThWAT* I, 846; Hague, *NIDOTTE* I, 775.

¹³⁾ BDB, 142; Hague, *NIDOTTE* I, 775.

¹⁴⁾ Hague, *NIDOTTE* I, 775.

¹⁵⁾ BDB, 142l. による。

¹⁶⁾ Andrée Herdner, *CTA* [*Corpus des tablettes en cunéiformes alphabétiques découvertes à Ras Shamra-Ugarit de 1929 à 1939*, Paris: Imprimerie nationale Geuthner, 1963], 10 [IV AB], III, 34f.; Schilling, *ThWAT* I, 846.

¹⁷⁾ Herdner, *CTA*, 19 [I D], II, 37; Schilling, *ThWAT* I, 846.

¹⁸⁾ Herdner, *CTA*, 4 [II AB], V, 26f.; Schilling, *ThWAT* I, 846.

¹⁹⁾ Jenni/Westermann, *THAT* I, 904; Schilling, *ThWAT* I, 846; Hague, *NIDOTTE* I, 775.

²⁰⁾ この点は現代ヘブライ語でも同様であり、現代ヘブライ語辞典 Jaacov Lavy, *Langenscheits Taschenwörterbuch der Hebräischen und Deutschen Sprache*, I, Berlin/München/Wien/Zürich/New York: Langenscheit, 1992, 41 において、ピエル動詞の בִּשְׂרָ が見出し語としてあげられており、その下にヒトパエル動詞の בִּשְׂרָ だけが例示されている。

²¹⁾ サムエル下 4:10, 18:20, 22, 25, 27, 列王下 7:9。

この知らせは明確に「悪い知らせ」であり、なぜ「良い知らせ」を意味する動詞 רָשָׁע が使われているのかは不明とされているが²²⁾、後続するサムエル上 5 章では、神の箱を奪ったペリシテに厄災が襲ったため、同 6 章でペリシテが神の箱をイスラエルに返還する事態に陥ったことを考えると、この知らせはイスラエル側とペリシテ側にとって、「良い知らせ」であると同時に「悪い知らせ」でもあるというアンビヴァレントな意味を含んでいると見なせるのではなかろうか。

3.2.1.2. サムエル上 31:9

サムエル上 31:1-13 は、ギルボア山でのイスラエルとペリシテとの戦争でサウルの自害とその息子たちの死を伝える記述 (31:1-7) に続けて、神殿とその民に「良い知らせを告げるために」(רָשָׁע)、ペリシテ軍はサウルを斬首し、その武具を剥ぎ取って、それらをペリシテ全土に送ったという描写 (31:8-10) である。

この「知らせ」は、ペリシテにとっては「良い知らせ」ではあるが、イスラエルにとっては「悪い知らせ」であるというアンビヴァレントな意味を有していると言える²³⁾。

3.2.1.3. サムエル下 1:20

サムエル下 1:1-16 において、ダビデがサウルと愛する友ヨナタンの死の知らせを受け、同 1:17-27 で彼はこのふたりの死に対する哀悼の歌「弓」を詠み、その歌のなかで彼はこの知らせをアシュケロン の街々に対して「知らせを告げ知らせるな」(רָשָׁע) と謳っている。

この「知らせを告げ知らせるな」(רָשָׁע) は、その前文の「ガトに伝えるな」(רָשָׁע) と対になっており、「良い知らせ」と訳すことは適切とは思えない。だが、この「知らせ」は、自分を殺そうとしたサウルの死という意味では「良い知らせ」かもしれないが、しかし自分を見出してくれたサウルに対する恩義や追憶を感じているという意味では「悪い知らせ」でもあるというアンビヴァレントな意味を持つ²⁴⁾。もっとも、ダビデにとって、ヨナタンの死は何物にも代え難い愛する友の死であり、「悪

い知らせ」でしかなかったことを考えると、サムエル下 1:20 の「知らせ」はアイロニカルな響きすら漂わせているように感じられる。

3.2.1.4. サムエル下 4:10 (2回)

サムエル下 4:1-12 において、レカブとバアナがダビデの政敵サウルの息子イシュ・ボシェトを殺害し、善かれと思ってイシュ・ボシェトの首をダビデに差し出したときに、ダビデがレカブとバアナに向かって、かつてサウルの死を伝えた者が、自らを「良い知らせを告げた者」(רָשָׁע) だと思ったのは、思い違いにほかならず、ダビデにとっては、その「良い知らせを告げた」と思い違いをした者を処刑することが彼がもたらした「良い知らせに対する報酬」(רָשָׁע) だったと述べられている。

前者のピエル分詞は「良い知らせ」の意味で用いられており、それが実際には「悪い知らせ」でしかないというアンビヴァレントな内容を含んでおり、後者の名詞の「良い知らせ」は、ギリシャ語の $\epsilon\upsilon\alpha\gamma\gamma\acute{\epsilon}\lambda\iota\omicron\nu$ の本来の意味と同じように、「良い知らせをもたらした者に対する報酬」の意味であり、しかもその報酬が処刑という「最悪の知らせ」になっているというアイロニカルな内容を持っている。

3.2.1.5. サムエル下 18:19, 20(3回), 22, 25, 26, 27, 31

サムエル下 18:19-19:1 において、ダビデは彼に謀反を起こして敵対した息子のアブサロムとの内戦において、ダビデ側がその内戦に勝利したとの知らせに続けて、息子アブサロムが殺されたとの知らせが伝えられるというコンテキストにおいて、その知らせに関して רָשָׁע (רָשָׁע / רָשָׁע) の語が 9 回用いられている²⁵⁾。

このテキストにおける רָשָׁע (רָשָׁע / רָשָׁע) の 9 回の用例は、王としてのダビデにとって内戦勝利の知らせは「良い知らせ」だが、いくら謀反を起こして敵になっていたとはいえ、父であるダビデにとってその息子アブサロムの死は「悪い知らせ」でしかなく、畳み掛けるかのように רָשָׁע (רָשָׁע / רָשָׁע) の語が 9 回も重ねられることによって、「良い知らせ」と「悪い知らせ」がアンビヴァレントな意味で用いられているという以上に、「良い知らせ」が「悪い知らせ」に一変するというアイロニカルな不条理を実感するダビデの心情が伝わってくる描写だと言

²²⁾ 詳細は、Schilling, *ThWAT* I, 847f.; Hague, *NIDOTTE* I, 775 を参照。

²³⁾ 同様の記述が歴代下 10:1-14 にある。本論文の 3.2.3.1. 参照。

²⁴⁾ この点については、Hague, *NIDOTTE* I, 775f. がすでに指摘している。

²⁵⁾ その内訳は、ピエル未完了形 3 回、ピエル分詞形 1 回、ヒトパエル未完了形 1 回、名詞形 4 回である。

える²⁶⁾。

3.2.2. 列王記上・下

3.2.2.1. 列王上 1:42

列王上 1:1-53 は、ダビデに死期が迫り、その王位の継承争いが生じたという記述において、王位継承に名乗りを上げたアドニヤのもとにヨナタンが訪れたさいに、アナニヤはヨナタンが「良いことを喜びの知らせとして告げにきたのであろう(וַיְבִרֶכְתִּי אֶת-יְהוָה)」²⁷⁾と予想したという内容である。

²⁶⁾ Hague, *NIDOTTE* I, 775; Schilling, *ThWAT* I, 847 参照。

²⁷⁾ 旧約聖書において、語根 בָּרַךְ が形容詞 טוֹב／הַיָּשָׁר (良い) と一緒に使用されている例は、列王上 1:42 (וַיְבִרֶכְתִּי אֶת-יְהוָה 「そして、良いことを喜びの知らせとして告げにきたのであろう」)、イザヤ 52:7 (טוֹבֵי בָרְכִים 「良いことを喜びの知らせとして告げる」)、サムエル下 18:27 (הַיָּשָׁר הַטוֹבִים 「良い喜びの知らせ」) の3回だけである。列王上 1:42 とイザヤ 52:7 では、בָּרַךְ のピエルの完了と分詞の目的語として טוֹב の語が「良いことを」の意で用いられているのに対して、サムエル下 18:27 では、名詞形 הַיָּשָׁרִים を形容する語として הַיָּשָׁר が「良い」の意味で使われている。それゆえ、目的語と形容詞という文法上の相違に従って、בָּרַךְ と טוֹב／הַיָּשָׁר の語の関係を分析することも可能なのだが、Schilling, *ThWAT* I, 847, 848f. に倣って、ここでは内容上の面から、列王上 1:42 とサムエル下 18:27 における בָּרַךְ と טוֹב／הַיָּשָׁר との関連を明らかにし、イザヤ 52:7 は、イザヤ書における בָּרַךְ の用例を扱うさいに詳しく扱うことにする(下注 39 参照)。

列王上 1:42 とサムエル下 18:27 の両テキストは、極度の精神的緊張のなかで、「良いことを喜びの知らせとして告げ」られること、ないしは「良い喜びの知らせ」を熱望しているダビデとアドニヤの発言としてそれぞれに描かれており、その期待の大きさの表現として、「良いことを喜びの知らせとして」や「良い喜びの知らせ」という諄い言い回しになっているものと思われる(Schilling, *ThWAT* I, 847 が同様の見解)。加えて、両テキストにおいて、そのようなダビデとアドニヤの切なる期待は見事に断ち切られてしまうのであり、「良いことを喜びの知らせとして」が「悪いことを悲しみの知らせとして」告げられてしまい、「良い喜びの知らせ」は「悪い悲しみの知らせ」になってしまうという、絶頂からどん底へというコントラストとして両テキストの物語を描くことが企図されているがゆえに、「良いことを喜びに知らせとして告げにきたのであろう」や「良い喜びの知らせ」という諄い言い回しが効果的な「文学装置」になっている。したがって、旧約聖書の読者がこのコントラストを理解するためにも、たとえ諄くならうとも、両テキストは「良いことを喜びに知らせとして告げにきたのであろう」、「良い喜びの知らせ」と翻訳することが必要なのである。

以上の理由から、両テキストの「良い知らせ」が単なるニュートラルな「告知」や「知らせ」の意味に使われている(Koeler/Baumgartner, *HAL* I, 156)とは言いえないのであり、両テキストに טוֹב の語が付加されていることを勘案して訳すと、両テキストにおける וַיְבִרֶכְתִּי と הַיָּשָׁר とは、「良い知らせ」ではなく、בָּרַךְ のもうひとつの意味である「喜びの知らせ」の意で使われていると見なすのが妥当である(Schilling, *ThWAT* I, 847 参照)。

また、列王上 1:42 の וַיְבִרֶכְתִּי אֶת-יְהוָה の翻訳の問題だが、

この「良い知らせ」は、アナニヤが王位継承の「良い知らせ」を予想したのとは裏腹に、ヨナタンはダビデがソロモンに王位を継承したということとを告げに来ており、したがってこのテキストにおける「良い知らせ」は、その予想に反して、急転直下「悪い知らせ」になるというアイロニカルな響きを持っている。

3.2.2.2. 列王下 7:9

列王下 6:8-7:20 は、イスラエルとアラムとの戦争において、ヤハウエの奇跡によってアラム軍が敗走したという記述において、イスラエルの4人の者がアラム軍が敗走したことを「良い知らせの日」(יְמֵי הַשְּׂמֵחָה)と呼ぶ用例である。

この「良い知らせ」もまた、イスラエル軍にとっては戦勝の「良い知らせの日」であると同時に、アラム軍にとっては敗戦の「悪い知らせの日」であるというアンビヴァレントな意味を持っている。

3.2.3. 歴代誌上

3.2.3.1. 歴代上 10:9

歴代上 10:1-14 は、サウルの死を伝える記述であり、ペリシテ軍が神殿とその民に「良い知らせを告げるために」(וַיְבִרֶכְתִּי אֶת-יְהוָה)、サウルを斬首し、その武具を剥ぎ取って、それらをペリシテ全土に送ったという描写(10:8-11)である²⁸⁾。

この「知らせ」は、ペリシテにとっては「良い知らせ」ではあるが、イスラエルにとっては「悪い知らせ」であるというアンビヴァレントな意味を有し

ここでは「そして、良いことを喜びの知らせとして告げにきたのであろう」と訳したが、וַיְבִרֶכְתִּי を単なるニュートラルな「告げるであろう」の意にとれば、「良いことを告げにきたのであろう」と訳せば済むことだが、上述したように、ここでの וַיְבִרֶכְתִּי は「喜びの知らせを告げるであろう」の意であり、טוֹב (そして良いことを)の強調を活かすために、拙訳のように「として」の語を補って「そして、良いことを喜びの知らせとして告げにきたのであろう」と翻訳する方が適切である。したがって、ほとんどの翻訳が、TOB「あなたは必ずや良い知らせを告げるべきである」(tu as sûrement une bonne nouvelle à annoncer) やドイツ語共同訳「あなたは良い知らせを持って来るに違いない」(Du bringst sicher eine gute Nachricht)のように、簡略化させた分かりやすい訳になっていると言わざるを得ない。なお、ギリシャ語 70 人訳では、*kai ágathá eúaggélisai* とギリシャ語訳されているが、このギリシャ語を日本語に訳す場合にも、ヘブライ語原文同様に、「として」の語を補って、「そして、良いことを喜びの知らせとして告げるのであろう」とも訳すほかない。

²⁸⁾ 同様の記述がサムエル上 31:1-13 にある。本論文の 3.2.1.2. 参照。

ている。

3.2.3.2. 歴代上 16 : 23

歴代上 16 : 1-43 は、神の箱の安置とそれにまつわる諸祭儀に続く記述において、詩 96 : 2 の讃歌を用いた神讃美のなかで、「日から日に救いを良い知らせとして告げよ」(בְּטוֹרֵךְ מִיְיָ לְיִשְׂרָאֵל לְיָמֵינוּ וְלְיָמֵי דָוִד וְלְיָמֵינוּ) との宣言をその内容とする²⁹⁾。

この知らせは神の箱の安置とそれにまつわる諸祭儀のさいに詠われた神讃美であり、明瞭に「良い知らせ」を意味するものだと考えられるが、歴史的にはバビロン捕囚後の終末論的救済を意図した内容だと言えるであろう。

3.2.4. 詩編

3.2.4.1. 詩 40 : 10 (口語訳 40 : 9)

詩 40 : 1-18 は、ダビデの感謝の詩編として描かれており、大集会において「義を良い知らせとして告げる」(בְּטוֹרֵךְ יְיָ אֱלֹהֵינוּ) と記されている。

この知らせは神の教えや救済と同義に扱われていると考えられ、明確に「良い知らせ」の意味で用いられている。

3.2.4.2. 詩 68 : 12 (口語訳 68 : 11)

詩 68 : 1-36 は、出エジプトからエルサレム征服までの歴史とヤハウエの終末論的救済を描くコンテキストにおいて、「大勢の良い知らせを告げる女たち」(בְּטוֹרֵךְ הַמַּלְאָכִים) が敵の王たちが敗走する様子を知らせるといった内容である。

この知らせは敵軍の敗走を意味しており、それゆえイスラエルの勝利を「良い知らせ」として述べるものだが、その勝利の「良い知らせ」は現実の戦勝を指しているのではなく、この詩編の後半に立ち現れている終末論的描写からも窺われるように、イスラエルの終末論的救済と統治へと連なる思想を表している。

3.2.4.3. 詩 96 : 2

詩 96 : 1-13 は、讃美の詩編であり、「日から日に救いを良い知らせとして告げよ」(בְּטוֹרֵךְ יְיָ לְיִשְׂרָאֵל לְיָמֵינוּ וְלְיָמֵי דָוִד וְלְיָמֵינוּ) という用例である。

この知らせは、すでに触れたように³⁰⁾、歴代上 16 : 23 にも引用されており、明瞭に「良い知らせ」の意味を持つものだが、歴史的にはバビロン捕囚後

の終末論的救済を意図した内容だと言えるであろう。

3.2.5. エレミヤ 20 : 15

エレミヤ 20 : 14-18 は、エレミヤが自らの誕生を呪う記述であり、20 : 15 において「呪われよ、わたしの父に良い知らせを告げた」(בְּטוֹרֵךְ) 者、あなたに男の子が生まれたと言って、大いに喜ばせた者は〔呪われよ〕というテキストである。

この知らせは、エレミヤが自らの誕生を呪うという状況で用いられているとはいえ、動詞 בְּטוֹרֵךְ が男子の誕生に関連して「良い知らせを告げる」という意味で使われており、これは先に確認したように、アラビア語やウガリット語において、セム語に共通の語根 bsr が男子の誕生と密接に関連していることと軌を一にする。

3.2.6. ナホム 2 : 1

ナホム 1-3 章はニネベの陥落を伝える神託であり、2 : 1 において「良い知らせを告げる者」(בְּטוֹרֵךְ) に言及している。

この「良い知らせを告げる者」(בְּטוֹרֵךְ) は「平和を宣べ伝える者」(בְּטוֹרֵךְ שְׁלוֹמִים) と対になっており、まさに「良い知らせ」ではあるのだが、しかしその「良い知らせ」とは裏腹に、ニネベ陥落が神託として語られることを考えると、この「知らせ」はやがて「悪い知らせ」になるというアイロニカルな響きを含んでいると考えられるのである。

3.3. イザヤ書における בְּטוֹרֵךְ (בְּטוֹרֵךְ) の用例

3.3.1. イザヤ書における用例の一覧と特徴

すでに確認したように、イザヤ書における בְּטוֹרֵךְ (בְּטוֹרֵךְ) の用例は、40 : 9 (2 回)、41 : 27、52 : 7 (2 回)、60 : 6、61 : 1 の 7 回である。これらの用例を一瞥すると分かるように、(第一) イザヤ (1-39 章) には בְּטוֹרֵךְ の用例はなく、第二イザヤ (40-55 章) に 5 回、第三イザヤ (56-66 章) に 2 回用いられている。つまり、イザヤ書に בְּטוֹרֵךְ (בְּטוֹרֵךְ) の語を導入したのは第二イザヤであり、そこに第二イザヤの明確な戦略があるものと考えられる。そして、同様の想定は בְּטוֹרֵךְ (בְּטוֹרֵךְ) の語を踏襲した第三イザヤにも妥当する。ここでは、まずは第二イザヤの 5 回の用例を検討し、その後第三イザヤの 2 回の用例を論じることにする。

²⁹⁾ 詩 96 : 2 の解釈については、本論文の 3.2.4.3. を参照。

³⁰⁾ 本論文の 3.2.3.2. を参照。

3.3.2. 第二イザヤ

3.3.2.1. イザヤ 40:9 (2回)

第二イザヤ冒頭の40:1-11は、エルサレムの再興とユダヤの民のバビロン捕囚からの帰還を約束する内容が描かれており、この再興と捕囚からの解放をユダの町々に告知させるために、かの都「シオン／エルサレム」が、2度にわたってピエル分詞女性形で人間に擬せられ、「良い知らせを告げる者」(𐤀𐤍𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏)としての役割を与えられている。

この「良い知らせ」は、バビロン捕囚からの解放という歴史的出来事に対する第二イザヤによる新たな解釈の提示であり、まさに「良い知らせ」として描き出されている。その筆致に表されている言語と心像はイスラエルの出エジプトを想起させるものになっており³¹⁾、第二イザヤはバビロンでの捕囚からの解放に出エジプトでの隷属状態からの解放のドラマの再演を感得し、捕囚からの解放を第二の出エジプトに見立てているのである³²⁾。

イザヤ 40:9 のテキストを訳出しておこう。

- 40a 高い山の上に登れ、
 良い知らせを告げる者 (𐤀𐤍𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏), シオンよ。
 9b 力の限り声をあげよ、
 良い知らせを告げる者 (𐤀𐤍𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏), エルサレムよ。

³¹⁾ Craig A. Evans, *From Gospel to Gospel: The Function of Isaiah in the New Testament*, *VTSup* LXX/2 (1997) [651-691] 654f.

³²⁾ この問題に関しては、Klaus Kiesow, *Exodustexte im Jesajabuch. Literarkritische und motivgeschichtliche Analysen*, OBO 24, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1979 を参照。

³³⁾ 私訳では、シオンとエルサレムを𐤀𐤍𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏と同格に取って翻訳したが、シオンとエルサレムを𐤀𐤍𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏の間接目的語と解し、以下のように翻訳することも可能である。

- 40a 高い山の上に登れ、
 シオンに良い知らせを告げる者よ。
 9b 力の限り声をあげよ、
 エルサレムに良い知らせを告げる者よ。
 9c [声を] 上げよ、恐れるな。
 ユダの町々に言え、
 見よ、あなたたちの神を。

Clines (ed.), *DCH* II, 277 がこのテキストにおけるシオンとエルサレムを主語および間接目的語の両面から解説しているように、文法的にはどちらの解釈も可能である。だが、このテキストの𐤀𐤍𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏がピエル分詞女性形単数であることを鑑みると、シオンとエルサレムは間接目的語ではなく、第二イザヤと第三イザヤにおいて、シオンとエルサレムが女性に擬せられていることから窺われるように(中沢訳 [前田護郎/中沢洽樹『聖書』前田護郎責任編集(世界の名著13)中央公論社, 1978年, 243頁注5参照]), 𐤀𐤍𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏とシオンとエルサレムを同格に取り、「良い知らせを告げる者、シオンよ」「良い知らせ

- 9c [声を] 上げよ、恐れるな。
 ユダの町々に言え、
 見よ、あなたたちの神を³³⁾。

このテキストにおいて、「高い山の上に登れ」(40:9a)「力の限り声をあげよ」(40:9b)と命じられている「シオン」(40:9a)と「エルサレム」(40:9b)は、「ユダの町々」(40:9c)に向かって、捕囚からの解放の「良い知らせを告げる者」としての役割を与えられている³⁴⁾。かつての栄光ある神の都「エルサレム／シオン」に再びその配役が与えられ、この都が神の都として、再びその栄光を取り戻すということが、「良い知らせ」として、第二イザヤ冒頭のテキストにおいて、この預言者によって語られているのである³⁵⁾。

を告げる者、エルサレムよ」と翻訳することが至当である。

私訳同様に、𐤀𐤍𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏と「シオン／エルサレム」を同格とみなす翻訳としては、*RSV*, *TOB*, ドイツ語共同訳がある。また、シオン(エルサレム)を𐤀𐤍𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏の目的語と解する翻訳は、口語訳、新共同訳、中沢訳(前田/中沢『聖書』244頁)、関根正雄訳(関根正雄訳『新訳 旧約聖書』教文館, 1997年, 858頁)、関根清三訳(関根清三訳『イザヤ書』(旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 VII』)岩波書店, 1997年, 168頁)などの日本語訳に多く見られる。なお、私訳の至当性については、左近淑『混沌への光——現代に語りかける旧約聖書』ヨルダン社, 1975年, 145-149頁、同「イザヤ書第40章1-11節」、日本基督教団出版局編『説教者のための聖書講解 積義から説教へ——イザヤ書』日本基督教団出版局, 1986年, 345-350頁, *TOB*, Evans, *VTSup* LXX/2, 654 n. 12 を参照。

³⁴⁾ 「エルサレム＝シオン」と「ユダの町々」とが肯定的に詩的コンテキストにおいて一緒に用いられている例は、イザヤ 40:9, 44:26, 詩 69:36 のみであり、その三例のうちイザヤ 40:9 と詩 69:36 (33-37) は神讚美の要求において用いられている (Craig C. Broyles, *The Citation of Yahweh in Isaiah 44:26-28*, *VTSup* LXX/1, 1997, (399-421) 400f.)。また、John J. Schmitt, *The City as Woman in Isaiah 1-39*, *VTSup* LXX/1, 1997, 95-119 は、イザヤ 1-39 章において女性として描かれているエルサレムの用例を研究しているが、シュミット自身その論文の冒頭で断っているように、「イザヤ書 44-66 章におけるこの描写 [=エルサレム] は、多くの場合 [1-39 章よりも] いっそう崇高に描かれており、それ自体 [=44-66 章] 独自に論究される必要がある。[したがって] 本論文は、40-66 章から 1-39 章を切り離す標準的な区分に従って、1-39 章に焦点をあてる」(Schmitt, op. cit., 95 n. 1) と発言しているのは正当である。

³⁵⁾ ただし、このテキストを「高い山の上に登れ、シオンに良い知らせを告げる者よ。力の限り声をあげよ、エルサレムに良い知らせを告げる者よ」と訳すならば、第二イザヤが「良い知らせを告げる者」として、天使から託宣を受けていることになり(中沢訳 [前田/中沢『聖書』245頁注1]参照)、内容上はこちらの意味に取りたい誘惑にも駆られるが、分詞 𐤀𐤍𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏 が女性形単数であることから言って、やはりこの説には与し得ないのである。なお、木田献一「預言と黙示」、石田友雄/木田献一/左近淑/西村俊昭/野本真也『総説 旧約聖書』日本基督教団出版局, 1984年, 407頁は、「ここで(=イザヤ 40:

そして、この「良い知らせ」の具体的内容は、捕囚からの帰還のみならず、イザヤ 40:10 からも明らかかなように、ヤハウェが力強い者として来臨し、ヤハウェの統治が始まり、ヤハウェが牧者として民を導くというものである。これは第二イザヤの「隠された構造」である「王としてのヤハウェ」を示唆するものであり³⁶⁾、神が王として永遠の統治を開始するという終末論的救済の表象として立ち現れている。

3.3.2.2. イザヤ 41:27

イザヤ 41:1-29 は、ヤハウェのイスラエルに対する選びと諸民族に対する審判が描かれており³⁷⁾、41:27 はヤハウェがエルサレムに対して「良い知らせを告げる者」(רַבֵּי טוֹבָה) を与えよとの約束をするクライマックスの描写である。

イザヤ 41:27 は以下のようなテキストである。

41:27a シオンに最初に、見よ、それらを見よ³⁸⁾。

27b そしてわたしはエルサレムに良い知らせを告げる者(רַבֵּי טוֹבָה) を与えよ。

この「良い知らせを告げる者」は、歴史的にはペルシャの王キュロスを指すと目されており、したがってここでの「良い知らせ」とは、キュロスを通して実現するバビロン捕囚からの帰還を指しているものと思われる。イザヤ 40 章において、第二イザヤはイスラエルを取り囲み敵対する諸民族の神々とヤハウェとが天上で戦い、ヤハウェが勝利し、ヤハウェがキュロスを通してイスラエルの選びと贖いとしての捕囚からの帰還を現実のものにするということを語っている。そして、第二イザヤはその「良い知らせ」をヤハウェの終末論的な法廷という壮大な舞台設定を用いて、捕囚からの帰還をヤハウェのイスラエルの選びと贖いの壮大な預言劇(神託劇)として物語っているのである。

3.3.2.3. イザヤ 52:7 (2回)

イザヤ 52:1-12 は、先に第二イザヤの「隠された構造」として指摘した「王としてのヤハウェ」のテーマが物語られており、イザヤ 52:7 はまさに「あなたの神が王になった」ことを告知する者が「良い知らせを告げる者」(רַבֵּי טוֹבָה) と呼ばれ、その告知内容が「良いことを喜びの知らせとして告げ[る]」(רַבֵּי טוֹבָה רַבֵּי טוֹבָה) と言われている。

イザヤ 52:7 は次のようなテキストである。

52:7 山々の上になんと美しいことか、
良い知らせを告げる者(רַבֵּי טוֹבָה)の足は。
彼は平和を宣べ、良いことを喜びの知らせとして告げ(רַבֵּי טוֹבָה רַבֵּי טוֹבָה)³⁹⁾、救いを宣べ、

9) 『よきおとずれを伝える者』は女性形の名詞となっているが、これは職務を表わす女性形であろう」と説明しているが、上記の事由から斥けられる説である。

³⁶⁾ Trygve N. D. Mettinger, In Search of the Hidden Structure: YHWH as King in Isaiah 40-55, *VTSup* LXX/1, 1997, 143-154, esp. 144. なお、「王としてのヤハウェ」、「ヤハウェの王としての支配」、「ヤハウェの王位」については、後述のイザヤ 52:7 の解釈を参照。

³⁷⁾ 中沢訳(前田/中沢『聖書』245 頁注 8)は、イザヤ 41:1-42:4 をひとまとまりと解し、「41:1-42:4 は歴史の法廷における神の審判。神が諸国民の代表を呼び出し、その中にイスラエルを立てて神の経綸を論ずる壮大な劇詩。主題は神の選びである」と説明している。なお、イザヤ書 40 章を劇に見立てる解釈は広く受け入れられており、一例をあげると、J. Kenneth Kuntz, The Form, Location, and Function of Rhetorical Questions in Deutero-Isaiah, *VTSup* LXX/1, 1997, (121-141) 138 が、イザヤ 40:1-29 に「裁判を擬した劇」(The Drama of a simulated trial) という表現を用いている。

³⁸⁾ 41:27a は BHS の原文を直訳したものだが、このテキストはヘブライ語原文が破損していると考えられており(John L. Mckenzie, *Second Isaiah: A New Translation with Introduction and Commentary*, AB 20, New York/London/Toronto/Sydney/Auckland: Doubleday, 1968, 34 参照)、このままではそもそも文章として意味をなさないで、種々の読み換えが試みられている(BHS のアパルトゥス参照)。以下にその読み換えを例示しておく。ギリシャ語 70 人訳「最初にシオンにわたしは与えるであろう(ἀρχὴν Σιων δώσω)」。RSV 「わたしは最初にそれをシオンに宣告した(I first have declared it to Zion)」、関根正雄訳「わたしが最初にシオンに語り」(862 頁)、口語訳「わたしははじめてこれをシオンに告げた」。新共同訳「見よ、シオンに初めから告げられていたことはここに実現した」。ドイツ語共同訳「わたしはシオンに最初の者として(言った)、『こちらを見よ、ほらここにいる』(Ich habe Zion als erster (gasagt): /Sieh her, da ist es!)」、関根清三訳「最初にシオンに、『見よ、これらを見よ』(という知らせ)を、またエルサレムに、良い知らせを伝える者を、わたしが与えよう」(180 頁)、イ

ヴァンズ訳「わたしはシオンに『見よ、それらを見よ』と言う最初の者である(I am the first who says to Zion, "Behold, behold them")」(Evans, *VTSup* LXX/2, 654)。また、中沢訳(前田/中沢『聖書』248 頁)は、27 節を 29 節の次に移して、「見よ、わたしは無償で、恵みをシオンに、福音の使者をエルサレムに与える」と訳している。

³⁹⁾ 上注 27 で予告しておいたように、ここで語根 רַבֵּי が טוב (良い) と一緒に用いられているイザヤ 52:7 の רַבֵּי טוֹבָה רַבֵּי טוֹבָה (「良いことを喜びの知らせとして告げ[る]」) の翻訳上の問題を整理しておきたい。Schilling, *ThWAT* I, 848f. が説明するように、イザヤ 52:7 の רַבֵּי טוֹבָה の付加は副詞的なものではなく、רַבֵּי の特定のニュアンスを明らかにするものとしては解釈されない。であり、このテキストでの טובָה は שְׁלוֹמָה (平和を宣べる) と נִשְׂעָה (救いを宣べる) における שְׁלוֹמָה (平和) と נִשְׂעָה (救い) と同様に רַבֵּי טוֹבָה の目的語として用いられている。したがって、רַבֵּי טוֹבָה רַבֵּי טוֹבָה は、「として」の語を補って「良いことを喜びの知らせとして

シオンに向かって言う、「あなたの神は王になられた」と。

イザヤ 52:1-12 の「良い知らせ」は、直接的にはバビロン捕囚からの解放と帰還を意味する⁴⁰⁾。しかし、「イザヤ 52:7 において、それ [= 𐤀𐤁𐤁𐤁] はバビロンからの『脱出 (Exodus)』 (52:11-12) の問題を扱っているだけでなく、バビロンからの^{エグソドゥス}脱出とともに神の王としての支配 (Königsherrschaft Gottes) が始まったという知らせとも関連している⁴¹⁾と指摘されているように、「王としてのヤハウェ」という第二イザヤの「隠された構造」が垣間見える。

また、イザヤ 52:7 がそのコンテキストを置くイザヤ 52:7-10 は、イザヤ 51:9-52:11 のマクロ・コンテキストに包摂されており、そのマクロ・コンテキストには、「起きよ、起きよ」(52:9)、「目を覚ませ、目を覚ませ」(51:17)、「起きよ、起きよ」(52:1)、「立ち去れ、立ち去れ」(52:11) という二重の命令がその全体を覆っているというレトリカルな特徴が看取される⁴²⁾。

「告げ〔る〕」と訳すことが至当である。また、ギリシャ語 70 人訳では *ὡς εὐαγγελιζόμενος ἀγαθά* とギリシャ語訳されているが、これもヘブライ語同様、「として」の語を補って「良いことを喜びの知らせとして告げる」とでも訳すほかはないのである。

さて、諸訳を参照してみると、𐤀𐤁𐤁𐤁 の語による強調を活かしているのは、RSV「良いことの良い知らせをもってくる」(who brings good tidings of good)、TOB「良いことの知らせをもってくる」(qui porte un message de bonté)、新共同訳「恵みの良い知らせを伝え」、関根清三訳「幸せな良い知らせを伝える者」(244 頁) ほかである。また、簡略化して訳している翻訳としては、中沢訳「よき知らせをもたらし」(前田/中沢『聖書』267 頁)、関根正雄訳「幸いを告げ」(887 頁)が、𐤀𐤁𐤁𐤁 を単に「告げる」の意味にとって翻訳しており、ドイツ語共同訳「喜びの知らせをもたらす」(der eine frohe Botschaft bringt) は𐤀𐤁𐤁𐤁 の語を省略した翻訳にしている。確かに、𐤀𐤁𐤁𐤁 を単に「告げる」と訳すか、𐤀𐤁𐤁𐤁 を等閑視するほうが翻訳としては滑らかにはなるが、そのような翻訳では、𐤀𐤁𐤁𐤁 (平和) と 𐤀𐤁𐤁𐤁 (救い) には 𐤀𐤁𐤁𐤁 (宣べる〔者〕) が使われ、𐤀𐤁𐤁 (良いこと/善/幸い) には 𐤀𐤁𐤁𐤁 (良い知らせを告げる〔者〕) が用いられているという、用語の使い分けの意味を失ってしまう。つまり、このテキストでも、サムエル下 18:27 や列王上 1:42 同様、𐤀𐤁𐤁𐤁 を𐤀𐤁𐤁 の語によって強調しているのであり、翻訳としては拙訳のように「として」の語を補って「良いことを喜びの知らせとして告げ〔る〕」と訳するのが至当である。なお、上注 27 参照。

⁴⁰⁾ 中沢訳 (前田/中沢『聖書』267 頁注 5)、Roger N. Whybray, *Isaiah 40-66*, NCB, Grand Rapids: Eerdmans, 1981, 167; Evans, *VTSup* LXX/2, 655 参照。

⁴¹⁾ Schilling, *ThWAT* I, 848.

⁴²⁾ Mettinger, *VTSup* LXX/1, 145-148. メッティンガーによると、イザヤ 51:9-11 がイザヤ 52:7-10 と同一の

さらに、イザヤ 51:9-52:11 のコンテキストには、イザヤ 51:9-11 の「カオスの戦い」(chaos battle/Chaoskampf)⁴³⁾ のモチーフ、イザヤ 52:7 の「ヤハウェの王位」(The Kingship of YHWH) のモチーフ(「あなたの神は王になられた」)、イザヤ 52:8b の「ヤハウェがシオンの神殿の聖所を住まいとする」とのモチーフ(「ヤハウェがシオンに帰還する」)が含まれており⁴⁴⁾、そこには「戦い-王位-宮殿」という天地創造(宇宙開闢)に関する古代の神話のパターンが看取されるのである⁴⁵⁾。

以上のような古代の神話のモチーフをふんだんに盛り込みつつ、天地創造(宇宙開闢)以前の神々の「カオスの戦い」にまで遡ることによって、今まさにバビロン捕囚からの解放を嚆矢として実現するであろうシオンにおけるヤハウェの王としての支配が、「良い知らせ」として告知知らせられているのである⁴⁶⁾。したがって、イザヤ 52:7 における「良い知

詩に属すと見なす者には、Paul Volz, *Jesaja II. Zweite Hälfte, Kap. 40-66*, KAT IX/2, Leipzig: A. Deichertsche Verlagsbuchhandlung D. Werner Scholl, 1932, 116-125; Remy Lack, *La symbolique du livre d'Isaïe, AnBib* 59 (1973), 186-187 があるという。

⁴³⁾ 「カオスの戦い」とは、天地創造以前の神々の戦いに関する宇宙開闢神話であり、バビロニアの天地創造叙事詩であるエヌマ・エリシュに遡源する神話と考えられる。旧約聖書では、ヤハウェが海の怪物であるラバブやレヴィヤヤタンを征服して天地(宇宙)を創造した物語として描かれている(イザヤ 52:9-11, 詩 74:12-17, 89:10-13, ヨブ 26 章参照)。エヌマ・エリシュの天地創造の物語については、月本昭男『創世記 I — 創世記注解 I』(リーフ・バイブル・コメンタリーシリーズ) 日本基督教団宣教委員会「現代の宣教」のための聖書注解書」刊行委員会/日本基督教団出版局、1996 年の各所に詳しい。また、「カオスの戦い」に関しては、Thomas Podella, *Der „Chaoskampf-mythos“ im Alten Testament, Eine Problemmanzeige*, in: Manfred Dietrich/Oswald Loretz (Hrsg.), *Mesopotamica-Ugaritica-Biblica. Festschrift Kurt Bergerhof*, AOAT 232, Kevalaar: Butzon & Becker, 1993, 283-329 を参照。

⁴⁴⁾ ヤハウェの王としての支配が、ほかならぬシオンという聖地においてのみ実現されうるのだという思想については、詩 24:7-10, 出エジプト 15:17-18, およびエゼキエル 20:40 を参照。

⁴⁵⁾ Mettinger, *VTSup* LXX/1, 148-151.

⁴⁶⁾ すでに指摘したように、第二イザヤはバビロン捕囚からの解放を出エジプトの再演、第二の出エジプトに見立てていると考えられるが、Mettinger, *VTSup* LXX/1, 149 によると、神的王位やカオスの戦いを示唆するような内容は最古の出エジプト伝承には含まれてはならず、後代になってそれらのモチーフが祭儀を通して出エジプト伝承に取り入れられたと見なされるのである(詩 77:11-21, 114:2, 3, 5, エゼキエル 20:32-44 [特に 33 節], 出エジプト 15:1-18 [特に 18 節] 参照)。おそらくは、こういった後代の出エジプト伝承の神話的誇張がバビロン捕囚からの解放をカオスの戦いや神的王位といった神話と関連づける背景として機能したものと考えられるのである。なお、メッティンガーによれば、この点に関す

(8-13節)、「シオンの名誉が回復され」(14-16節)、「シオンに平和が与えられ」(17-18節)、「シオンに対してヤハウェの永遠の宇宙的支配が宣せられる」というものである(19-22節)⁵⁰⁾。したがって、イザヤ60章の主題は「シオンの再興と永遠の栄光」であり⁵¹⁾、イザヤ60：6⁵²⁾は「エルサレムの栄光が再び見られる〔聖書〕箇所における神託の一部」⁵³⁾ということになるのか。

イザヤ60章に関しては、ハガイ書(特に2：6-9)やゼカリヤ書(特に6：15)との関連を想定し、これら二預言書とイザヤ60章とが並行する同時代の文書だと見なす向きもあるのだが⁵⁴⁾、イザヤ60章の素材をハガイ書やゼカリヤ書よりも後代のものと見なす見解により蓋然性があると考えられるゆえに⁵⁵⁾、この見解に容易に与するわけにはいかない⁵⁶⁾。それよりはむしろ、イザヤ60章が「イスラエルのための神の救いの働きについての諸民族の驚嘆に関する詩編での諸々の声明と一致する」⁵⁷⁾との見解に添って議論を運ぶことが肝要であろう。

また、別の見解としては、イザヤ60章が詩22：28, 66：4, 72：11, 86：9, 102：22-23と関係するとの想定⁵⁸⁾やエゼキエル書および詩48編や72編との関係を想定する向きもある⁵⁹⁾。これら詩編のテキストとの関係から示唆されることは、イザヤ60：1-6において、忠誠を示すため貢ぎ物を携えシオンへと赴く諸民族の王たちの姿を通して、「普遍的な権威と尊敬の中心としてのエルサレム〔＝シオン〕の高位」⁶⁰⁾が強調されていると考えられるのである。

したがって、イザヤ60：6の「良い知らせ」は、「シオンの再興と永遠の栄光」のもとに諸民族とその王たちがイスラエルに仕える、すなわちイスラエルが諸民族とその王たちを支配することを実現する「ヤハウェの誉れ」を指していると思なうのである。すなわち、第三イザヤはイザヤ60：6における「良い知らせ」の告知によって、バビロン捕囚からの解放の後に到来するヤハウェによるイスラエルの世界統治を預言することを通して、世界がひとつとなるという普遍主義、超民族(国家)主義を標榜しているようでありながら、実際には極めてラディカルなナショナリズムでしかないシオンを中心とするイスラエルの世界統治という新時代の到来を思い描いているということである⁶¹⁾。

3.3.4.2. イザヤ61：1

イザヤ61：1-11は、ヤハウェの預言者の召命とヤハウェの救済の告知が記されており、そのテキスト冒頭の61：1でヤハウェの預言者の使命が「貧しい者たちに良い知らせを告げるため」(לְבָרֵךְ עַמְּנוּיִם)のものであることが明示されている。

イザヤ61：1-2はルカ4：18-19にギリシャ語70人訳から引用されているということもあって、極めて重要なテキストでもあるゆえに、ここでは1-3節を訳出し、少し詳しく論じてみたい。

⁵⁰⁾ 関根清三訳『イザヤ書』278頁注3参照。

⁵¹⁾ 中沢訳(前田/中沢『聖書』272頁)、関根正雄訳(900頁)、関根清三訳『イザヤ書』278頁は、イザヤ60章に「シオンの栄光」との表題を付している。

⁵²⁾ Whybray, *Isaiah 40-66*, 233は、ぎこちない繋がりゆえにイザヤ60：6の後半部は後代の付加であると推測する。

⁵³⁾ Evans, *VTSup* LXX/2, 655.

⁵⁴⁾ Paul D. Hanson, *The Dawn of Apocalyptic: The Historical and Sociological Roots of Jewish Apocalyptic Eschatology*, Philadelphia: Fortress Press, 1975, 1979, 59-77; idem, *Isaiah 40-66*, Int, Louisville: John Knox Press, 1995, 218; Jacques Vermeylen, *Du prophète Isaïe à l'apocalyptique. Isaïe I-XXXV, Miroir d'un demi-millénaire d'expérience religieuse en Israël*, II, ÉB, Paris: Gabalda, 1977, 471f.

⁵⁵⁾ Odil H. Steck, *Studien zu Tritojesaja*, BZAW 203, Berlin: de Gruyter, 1991, 95.

⁵⁶⁾ Clements, *VTSup* LXX/1, 443-449 参照。

⁵⁷⁾ Evans, *VTSup* LXX/2, 656.

⁵⁸⁾ Claus Westermann, *Das Buch Jesaja, Kap. 40-66*, ATD 19, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981, 286.

⁵⁹⁾ Clements, *VTSup* LXX/1, 446.

⁶⁰⁾ Clements, *VTSup* LXX/1, 444f.

⁶¹⁾ イザヤ60：1-6はマタイ2：1-12の占星術学者(魔術師)らの訪問の記述に影響を与えているゆえに(「金と乳香」[イザヤ60：6, マタイ2：11]ほか)、公現日の聖書日課として読まれているが(Clements, *VTSup* LXX/1, 443), マタイ2：1-12は新しいモーセとしてのイエスを描写しているのみならず、世界の王としてのイエスをもまた描いている(エドゥアルト・シュヴァイツァー『マタイによる福音書』佐竹明訳, NTD新約聖書註解2, NTD新約聖書註解刊行会, 1978年, 38-39頁参照)。このようなイエスを世界の王、統治者に祭り上げる神学の背後には、先に触れたイザヤ書の隠された構造である「王としてのヤハウェ」の思想(Mettinger, *VTSup* LXX/1, 143-154)が横たわっていると言えるであろう。

さらに言えば、イザヤ60章の「シオンの再興と永遠の栄光」というヤハウェの世界統治において、実際にはイスラエル民族が全世界の統治者になるという思想が露呈しているものであり、上述したマタイ神学における王としてのイエスの世界統治においても、実際にはキリスト教会が全世界の統治者になるとの思想が露呈しているという類比が存在する。そして、それを支える戦略がマタイ神学の締め括りである「イエスの世界宣教令発布」(マタイ28：16-20)というシナリオであり、この思想の行き着く先が、西洋キリスト教がイエス・キリストの名によって作り上げ、「神の死」の宣言のときまで連続と続いた、今はなき「キリスト教世界」(corpus christianum)という名の社会統治の思想だったと言えるのではなかろうか。

- 611 主ヤハウエの霊がわたしの上に、
ヤハウエがわたしに油を注がれたがゆえに。
貧しい者たちに良い知らせを告げるために、
彼はわたしを遣わされたのだ。
こころ砕かれし者たちを癒すために、
捕らわれし者たちに自由を、
また縛られし者たちに解放を宣言するため
に。
- 2 ヤハウエの恵みの年を、
またわたしたちの神の復讐の日を宣言する
ために、
すべて悲嘆に暮れる者たちを慰めるために、
- 3 シオンの悲しめる者たちに授けるために、
彼らに与えるために、
灰のかわりに花の髪飾りを、
悲嘆のかわりに歓喜の油を、
弱った霊のかわりに讃美の衣を。
そして彼らは、義の大樹、
栄光を称えるヤハウエの植樹と呼ばれるで
あろう。

このテキストにおける「良い知らせ」は、終末論的な救済の「良き知らせ」が「貧しい者」に告げられるものであるとの理解が示されている。富を批判するルカがこのテキストを引用していることも頷けるのだが、しかしこのテキストにはより複雑な裡の事情が隠されている。

もう少し詳しくテキストを分析すると、イザヤ 61 章は、「ヤハウエの預言者の召命」(1-3 節)、「シオン=エルサレムの救済告知」(4-9 節)、「救済の喜び」(10-11 節) から成るテキストである⁶²⁾。すでに言及したように、1-3 節の「ヤハウエの預言者の召命」のテキストに用いられている **בְּשִׁר** (**בְּשִׁרָה**) は、「貧しい者たちに」(**עַל הַנְּדָוִים**) 告げられるものであり、一見すると、まさに「貧しい者たちに」対して「良い知らせ」が告げられているとの第一印象を受ける。そして、その第一印象は後続するテキストによってさらに強められるのである。すなわち、「貧しい者に良い知らせを告げるために」(**לְבַשְׂתִּי עֲנָוִים**) という召命に続けて、さらに「こころ砕かれし者たちを癒すために」(**לְהַחֲיוֹת לְנַפְשֵׁי כָּרִיבִים**)、「捕らわれし者たちに自由を」(**לְשִׁבּוּת הַדְּרוֹר**)、「縛られし者たちに解放を」(**לְאַסְוִיָּתָם מִקְּבָחוֹת**)、「ヤハウエの恵みの年を」(**שָׁנַת־רַחֲמֵי יְהוָה**) と畳み掛けられており、こ

の「良い知らせ」を告知するヤハウエの預言者の使命が、いかに崇高な使命であるのかが強調されている。

しかし、その次に現れる「わたしたちの神の復讐の日を」(**יְדִיּוֹם נְקָם לְאַלְהֵינוּ**) という言葉は、およそ「良い知らせ」とは掛け離れた発言である。そして、この言葉を挟んで、さらに「すべて悲嘆に暮れる者たちを慰めるために」(**לְנַחֵם כָּל־נִלְחָם**)、「シオンの悲しめる者たちに授けるために」(**לְאַסְוִיָּתָם לְעַמִּי**) という「良い知らせ」が続いている。

このような預言の文学的構造から窺い知ることができるのは、これらの崇高とも言える種々様々な使命のなかに、「わたしたちの神の復讐の日」という一文を潜り込ませることによって、第三イザヤは第二イザヤから受け継いだ「良い知らせ」に「盲点」として隠されていた応報思想という負のベクトルへとその向きを一変させているのである。すなわち、イザヤ 61:1-3 において告げられている「良い知らせ」とは、「シオン=エルサレム」の「解放」という第二イザヤの用法を踏襲しつつも、そこにシオンの民以外に対する「復讐の日」という応報思想を密かに挟み込ませることによって、かつて捕囚で受けた恥辱を倍返しするという報復思想へと傾斜し、シオンの民以外の全民族は「シオン=エルサレム」に仕え、「シオン=エルサレム」は全民族の上に君臨することが述べられているということである (イザヤ 60:4-9 参照)。

したがって、このテキストにおける「貧しい者に」対する「良い知らせ」は、「シオン=エルサレム」にとっては「良い知らせ」ではあっても、「シオン=エルサレム以外」の人々にとっては「悪い知らせ」であるというアンビヴァレントな意味だということが理解できるのである。

3.4. まとめ——旧約聖書における **בְּשִׁר** (**בְּשִׁרָה** / **בְּשִׁר**) の用法

イザヤ書を除く旧約聖書の用例においては、**בְּשִׁר** (**בְּשִׁרָה** / **בְּשִׁר**) にはアンビヴァレントな意味やアイロニカルな意味が含まれていることが看取されたが、それはこの語が「戦争」や「内戦」に関して集中的に用いられていることに起因する。すなわち、戦争や内戦においては、一方の側の「戦勝」は確かに「良い知らせ」ではあるのかもしれないが、それは同時に別の側の「敗戦」をも意味するからである。特に、それは「ダビデとサウル」や「ダビデとアブサロム」といった近親憎悪的に内戦に陥った場合には、いっそうその不条理さが際立っているように感

⁶²⁾ 関根清三訳『イザヤ書』284 頁注 1 による。より詳細な区分は、Watts, *Isaiah 34-66*, 302 参照。

じられる。また、ダビデがその愛する友であるヨナタンを失ったテキストでは、戦争に明け暮れたダビデが哀悼の歌「弓」を詠み、戦争の悲哀を実感したにもかかわらず、謀反を起こして敵対した息子アブサロムの死を惹き起こし、その王位の継承においても対立が起こっていることを考えると、ヘブライ語の **רצח** が王の戦争に用いられていることから、この語が古代世界の帝国主義と密接に結び付いているとの想定を可能にする。

また、第二イザヤの5回の用例(40:9 [2回], 41:27, 52:7 [2回])においては、ヤハウェが世界の王となり、ヤハウェが「シオン=エルサレム」にその民を帰還させるという、第二の出エジプトとしての捕囚からの解放が、「良い知らせ」として語られていることが看取された。しかし、その「良い知らせ」は第三イザヤの2回の用例においては、シオンが世界の支配者となることが預言され(60:6),

さらに「わたしたちの神の復讐の日」が宣言されているのである(61:1-3)。ここにはヤハウェの世界統治という表向きの顔に隠された「シオン=エルサレム」による世界支配というナショナリスティックな裡の顔が盲点として隠されており、それが「シオン=エルサレム」にとっての「良い知らせ」として語られているのである⁶³⁾。しかも、これは新約聖書のルカ4:18-19(4:16-30)が引用するように、「貧しい者に良い知らせ(福音)を告げるために」と言われている「良い知らせ/福音」の裡の顔なのである。第二イザヤにおいては序曲にしかすぎなかったナショナリズムが、第三イザヤにおいて一気に高揚し、そのナショナリズムが現代イスラエルのシオニズムへと連なっているように、第三イザヤの「良い知らせ」は「シオン=エルサレム」という神の名を冠した「帝国主義」という裡の顔を見せていると言っているのである。

⁶³⁾ Adam Winn, *The Gospel of Mark: A Response to Imperial Propaganda*, in: idem (ed.), *An Introduction to Empire in the New Testament*, RBS 84, Atlanta: SBL Press, 2016, [91-106] 93は、イザヤ書のこれらのテキストから「神の勝利」や「神の支配」が突出していることを読み取りはするのだが、これらのテキストに内包される「帝国主義」に対する批判を展開することはしていない。